《翻　訳》

# ルサーン国際戦争と平和博物館(2)

Peter van den Dungen
坪　井　主　税（訳）

はじめに
1．ジャン デ ブロッホとその著作『将来の戦争』
(*Jean de Bloch and the War of the Future*)
2．反戦運動の救世主・ブロッホ（*A Vision of Peace*）
3．ルサーン国際戦争と平和博物館（*The Lucerne Museum*）
（以上，前号）
4．「平和展示」論争（*Controversy over the Museum's Character*）（以下，本号）
5．グロウスキー事件（*The Affair Gurowski*）
6．財政難――そして，閉館（*Difficulties and Liquidation*）

## 4　「平和展示」論争

ブロッホが博物館建設計画を発表した時，平和主義者側から一つの危惧が表明されていた。ブロッホが，その著作で展開した自説――すなわち，戦争の不可能性――を強く宣伝する道具として博物館を作るのではないか，という危惧であった。そしてこの危惧を共有した者たちは，博物館建設を進めるに当ってブロッホが，パリ万国博覧会時の戦争展示以来親しくしていた中立国スイスの軍人高官たちの忠告を全面的に取り入れていることを知って，安堵の胸を撫で下ろしていた。しかし、できあがった博物館を見て彼らは，ブロッホの自説を宣伝するようなものは外見上一切ないとはいうものの，博物館は平和博物館というよりは戦争博物館であるという評価を下した。(20) だがこの評価は，ブロッホの自説およびそれを分からせるために著作や今回の博物館の展示を通してブロッホがとったアプローチに対する誤解にもとづいた評価であった。戦争の不可能性というブロッホの主張は，平和主義者たちが自分たちの平和運動が無効にされる可能性があるからという理由でいたずらに軽視したり，脅威を感じたりするようなものではなかった。ブロッホがこの主張に込めた本当の意味は，全くというほどではないにし

ても殆ど同義の，いわゆる「クラウゼヴィッツ的戦争」の終焉――すなわち，大国間の戦争はもはや不可能――ということであったことを彼らは正しく理解すべきだったのである。

ブロッホの戦争の不可能性という自説は，彼の戦争の本質と進化の研究，とりわけ実際の戦闘行為に導入された最新の技術と戦争に不可欠な経済とその帰結に関する深い研究の末にたどりついたものである。ブロッホは，戦争それ自体が戦争を不可能にしていることを発見したのだ。前述したように，ブロッホの研究の目的は当初から，平和主義を啓蒙するためにではなく，戦争をできるだけ科学的に，かつ，客観的に分析することにあった。だから博物館も，ブロッホにとっては，自らの分析をより刻明に伝えられる場所という以外の何物でもなかった。ブロッホが博物館に置いたさまざまな視覚的展示物とその説明は，実はブロッホの分析の一つ一つをなしていたのである。確かに，ブロッホの結論は平和の必要性ということである，と捉えて間違いはない。しかしブロッホは，その結論を自らは語らず，著作の読者や博物館の来館者に委ねる方法をとったのである。その結果，ごく普通の平和主義者からの「戦争と軍隊に妥協している」とか「目的がはっきりしていない」とか「平和のメッセージが不十分である」とかの批判が出てきたのである。そして博物館開館後間もなく，かねてからブロッホの博物館は平和よりも，平和運動の阻害要因である戦争の不可能性を強く打ち出すのではないかという危惧を抱いていた平和主義者たちが博物館を批判する側にまわったのである。

一部の平和主義者は，開館式の際の「奇妙な光景」，すなわち，大勢のスイス軍人が軍服姿で式に参列していたことを問題視した。(21) これに対して博物館側は，「あのスイス軍人たちはみなそれぞれの地方の平和協会に属している者である」と説明した。もっともらしいが，平和主義者にとってはなお疑問の残る説明であった。なぜなら，そこには，博物館の設立から運営に至るまでそれらのスイス軍人たちが大きく関与していたこと――例えば，1903年５月に民間人のＪ.ツィママンが引き継ぐまで，博物館館長はスイス陸軍のピッカー中佐であったこと――や博物館の性格や内容の説明が一切なかったからである。平和主義者のさらなる不満は，博物館に対する軍人集団の一般印象がすこぶる良いというところにもあった。これは多分，軍人集団が良しとすることは何でも批判の対象にするという平和主義者の独断的な偏見と言ってよいだろう。しかし，軍人の側も同じことをしていたのである。例えば，ルサーン博物館開館記念号を組んだ軍事専門雑誌に載ったかなり長い論文の序に，そのことが明瞭に示されている。(22) 論文の筆者は言う――「もし，博物館が平和の大義の促進――これがブロッホの目的と考えるが――と称して戦争の恐怖の展示をしていたならば，それは，来館者に押しつけ的な感動を与えただろうが，その場合は，軍人は何人も本博物館に足を踏み入れることはなかったであろう。」この筆者のこの評価は間違っている。たとえヴェリシュチャージン風の戦争の恐怖や惨状の絵画が１，２枚なかったとしても，この博物館の目的が損なわれることはなかったのだ。同筆者はまた，博物館の戦争，兵器そして戦闘行為の歴史的な展示に対して，「かくも科学的，客観的な展示」と喜びを混じえて驚嘆している。これはこの筆者の言う通りだ。この博物館のベル

リンの武勲館（Hall of Fame）やウィーンの軍事博物館（Army Museum）と似て非なる所は，愛国的感情の昂揚や軍事力の誇示を目的とせず，戦争を純歴史的に展示したというところにあったのだから。この筆者はさらに，博物館のいくつかの展示コーナを詳述しながら，「展示品の数においては，他の博物館の方がここより多いかもしれないが，その説明の内容においては，ここを越えることはできない」と述べている。実際は，展示品の数からいっても，説明の内容からいっても，このルサーン博物館は他を凌駕していたのだ。「ルサーンを訪れる者は本博物館に立ち寄るべし。なかんずく，軍事訓練学校の教官は」と博物館推奨の弁を奮いながら，この筆者は冒頭の言葉にたち戻る――「もし博物館が，すでに誰もが当然のことと納得している戦争の惨状を展示して平和の大義を促進しようと建てられたのならば，それは，不要なものであったであろう。」この筆者は，1871年以来ヨーロッパの平和を維持してきたのは，戦争と平和の問題を全国民に意識づけた徴兵制の実施である，と言うのである。「平和は銃と共にあり」――これがこの筆者の平和観だったのであろう。

「博物館には明確な平和志向がない」というある平和運動家の批評は，軍人集団はもとより，それ以上に仲間の平和運動家たちをびっくりさせた。(23) 軍人集団はこれを賞賛すべき欠落と言い，平和運動関係者は成すべきことを成さなかった大失敗と見た。この博物館の平和志向の問題は，すでに，博物館開設からおよそ1年後の1903年9月にフランスのルーアン市とル・アーヴル市で開催された世界平和会議（Universal Peace Congress）の年次総会で重要議題として取り上げられていた。そこで，米国平和協会の代表であり，有名な平和主義者であったルシィア エイムズ ミードは，彼女の最近の博物館訪問の感想として，平和部門の展示がいかに不十分であるかを実感し，がっかりしたと語り，改善策を提案した。彼女の改善策は，世界各地の平和協会がそれぞれの活動をわかり易く説明した記録や表を博物館に送り，展示させ，それによって博物館の性格や目的を明確にしようというものであった。ミードの提案は同会議会長エミール アーノードにも支持された。(24) それから半年後，アルフレッド H.フリード――彼は，第一次大戦前の平和運動の牽引者ベルタ フォン ズトゥナーと共に『平和ウオッチ（*Friedens-Warte*）』を刊行，編集者となった人物なのだが――は，その年の博物館の年次報告書で，博物館が依然として平和部門の展示を受け入れがたいほど“継子扱い”し，ミードの正当な訴えに何の対処もしてこなかったことを知った。そこで今度は，フリードが声を上げた――「平和部門を大幅に拡大することは絶対に必要である。そのことによって，博物館の目的がより理解されることになるだろう。今のままでは，ブロッホの創造物も一般の軍事博物館と何ら変わらない。戦争部門の展示同様，専門家を雇い，できるだけ客観的に平和部門の展示を作らなければならない。」(25)

フリードの批判を受けて館長J.ツィママンは，1904年4月28日，次のような内容の返事を書き送った。第1に，「平和」は「戦争」と違って，これが平和だという展示物になりにくい。第2に，平和と戦争は不離一体，したがって，平和は対極の戦争を通してのみよく感じさせる

ことができる。ツィママンはまた，手紙に博物館の最新の目録を同封し，既設の「経済」・「国際法」・「平和」の各コーナーにかなりの数の展示物をすでに追加してあることを案内した。実は博物館は，博物館運営委員会副委員長ツィマーリ博士の発議で，今年度は戦争展示拡大予算を凍結し，可能な限りの予算を平和部門の拡大に回すことを決定していたのである。館長ツィママンは，この決定に基づいて，３つの拡大案を示した。第１は，国際仲裁裁判所の成功例を大きな板に図解すること。第２は，「ピース ウォール（平和の壁）」――すなわち，指導的な平和主義者の肖像画とその下に彼らの有名な言葉を付けたものを吊る壁――を新設すること。これに応えて，パリのラベという男性はカントとグロチウスのすばらしい肖像画を寄贈してくれた。またブロッホの遺族は，ブロッホの肖像画をオランダの画家ヤン テン ケイト――有名な『戦争に次ぐ戦争』他彼のいくつかの絵はすでに博物館に展示されている――に頼む費用を寄付してくれた。そして第３は，既設の有料・無料の平和関係印刷物・図書コーナーを拡充することであった。(26) 同年５月２日，フリードは再びツィママンに４頁にわたる手紙を送り，次のようなことを語った――「私は，かつて博物館の創設者ブロッホと共に仕事をし博物館建設計画をよく議論した間柄なので，彼がどういう目的で博物館を作ろうとしていたかを熟知している。すでに博物館開館式の時点で，平和展示の不十分さに気が付いていた。このことについては，博物館ガイドや来館者のコメントが裏打ちするところである。戦争の惨状を描いた絵画も指導的な平和主義者の肖像画も平和展示の核心にはなり難い。平和展示の中心となるべきは，平和運動の歴史や発展，そしてその強さと数々の成功について来館者に知悉させる展示であろう。平和の館への来訪者にとって最も重要なことは，戦争と破壊の道具の前では驚愕し沈黙しながらも，同時に偉大で真摯な平和運動が存在していることを知って安心と慰撫の気持ちを持てることなのだ。」これに対し，ツィママンもまた，長い返事をしたため，その中で，「ご指摘に感謝申しあげます。今後ともご忠告に沿った改善に努めていくことをお約束致します」と述べた。

同年末第13回世界平和会議が開催され，そこで，スイスのル・ロクル市代表ピエール クラージェト教授が，博物館は前回の会議で出されたミード提案を実行したとの報告をした。(27) これに対してミードも他の代表も教授の外交辞令的な報告では納得せず，相変わらず博物館方針の根本的変更を迫る意見を出した。この間，否，開館当初からずっと，博物館は平和展示に関してはベルン国際平和ビューロー事務局長のエリー デュコミュンの好意的な協力に依存していた。デュコミュンは館長から，何度も何度も情報提供，推薦状書き，展示物入手の口ききなどの助力を要請されていた。デュコミュンのお陰で博物館は，平和コーナーの図書やパンフレットを置くことができ，世界中の平和指導者に連絡して有名な先達や同時代のそれの写真や記録を入手することができ，テン ケイトの絵画も――本人の博物館の「苦しい台所」に対する好意的理解も手伝って――無利子分割払いの借用ということで展示することができていたのである。このデュコミュンの1906年12月の死は，（次章で述べるように）博物館財政がますます逼

迫する中，博物館にとってはまさに「かけがえのない損失」であった。[28]

註 20．註18の *The New York Times,* 29 June 1902, p. 32の記事参照。

21．W. T. Sead, *Opening of Peace Museum* in: *The Jewish Chronicle,* 13 June 1902, p. 22参照。

22．*Das Internatonale Museum für Krieg und Frieden in Luzern* in: *Militär-Wochenblatt,* vol. 87, nr. 62, 12. Juli 1902, pp. 1655-1660.

23．J. HUNT COOKE, A *Visit to the International Museum of Peace and War at Lucerne* in: *The Herald of Peace,* vol. 29, 1 December 1903, p. 149.

24．*Bulletin Officiel du 12e Congrès Universel de la Paix tenu à Rouen et au Havre* (22-27 Sept.). Berne, Bureau International de la Paix, 1903. p. 118参照。

25．*Luzern* in: *Die Friedens-Warte,* vol. Ⅵ, nr. 4, April 1904, p. 76.本定期刊行物はルサーン博物館の機関誌にもなっていた。これについては，1904年５月30日付のフリードからベルン国際平和ビューロー事務局長エリー デュコミュンへ宛てた手紙を見よ。

26．*Brief J.Zimmermann* in: *Die Friedens-Warte,* vol. Ⅵ, nr. 5, Mai 1904, p. 99 および *Luzern* in: ibid., vol. Ⅶ, nr. 4, April 1905, p. 79参照。

27．*Official Report of the 13th Universal Peace Congress held at Boston, Mass., U.S.A.* (3-8 Oct.). Boston, The Peace Congress Committee, 1904, p. 48.

28．1906年12月15日のツィママンからベルン国際平和ビューローに宛てた手紙を見よ。デュコミュンの博物館に対する絶え間ない努力は同ビューローの公文書に詳記されている。デュコミュンは，博物館と博物館が接触したかった平和指導者や平和関係機関との‘個人連絡事務所’の役割を果たしていた。

## 5　グロウスキー事件

博物館は当初から，現在地にはほんの数年の間だけという約束で開設された。土地の所有者であるルサーン市は，６年後には他の恒久的な場所に移設してもらうという前提で，土地――ゆうに100万フランを越える価値のある土地――と建物を無償貸与し，電気・水道さえも無料供給することを約束した。６年あれば，博物館事業を継続するかしないかの判断ができると市側も博物館側も考えたのである。博物館事業の成功の鍵といえる来館者数は，博物館関係者を満足させるものであった。開館２年目の1903年次，総来館者数は59,000――これは，ルサーン市人口の２倍に当たる――であった。次年度はさらに増え，62,000人。そして1905年は65,000人で，この数はその後数年続いた。この間，博物館は４月15日から10月31日の観光シーズンの期間にだけオープンしていたわけだから，月に10,000の来館者があったということになる。しかし有料来館者の数は，総来館者数から見るとずっと少なかった。例えば，開館初年の1902年は29,000，次の1903年と1904年はそれぞれ38,000，そして1905年が45,000であった。この入館料収入で，博物館の修理，維持，新規展示物の購入を賄ってきた。[29] この博物館を今後どうするか――1905年９月ルサーン市で開催された第14回世界平和会議は，これを議題の一つとした。そして同会議代表たちは博物館を訪問した際，博物館が不安定な財政状態にあることを知らされたのである。会議を代表するエリー デュコミュンのルサーン市への感謝の言葉も，市の，向こう２年の間に移転のための土地購入および建設に必要な費用を調達できなければ，現在の

展示物――これらを代表たちはこよなく称えていたのだが――は売却されることになるだろうという言葉に掻き消されてしまった。そしてこの市側の考えを裏打ちするかのように，博物館運営委員会のツィマーリ博士が博物館存続のために各代表が全力を尽くして仲間を募ってもらいたいとの「平和の友の会アピール」をしたのである。(30)

翌日，すなわち同会議の最終日，ベルギー代表で国会議員のホウゾウ デ レーアイは博物館の将来に関する報告を読み上げていた。彼の報告は，ツィマーリの要請に応えるべく，博物館をここ一両年中に移転させるのに必要な資金調達特別委員会の設置と委嘱される同委員会委員の発表であった。しかし，その報告のほんの数分後，同特別委員会が解散するという事態が起こった。ホウゾウ デ レーアイが喜色満面，会議参加者の一人グロウスキー デ ヴィーゼル伯爵から特別委員会に対し，新しい博物館の土地購入および建設費用として最高限600,000フランを現博物館に寄付しようとの申し出があったと発表したからである。(31) この晴天の霹靂のような発表は，割れんばかりの拍手を呼び，その拍手はグロウスキーが立ち上がって短い演説をし始めるまで続いた。グロウスキーは，寄付に2つの条件をつけた。第1は，新博物館を「平和と戦争の惨状を展示する博物館」にすること。そして第2は，グロウスキーを新博物館の唯一の後見人にすること。会議代表の一人ロシア系フランス人の社会学者で平和主義者のジャック ノヴィコーが感想を述べた――「ポーランド人が創設した博物館を，別の者が保存の責任を果たすのもいいかもしれない。」(32) この時グロウスキーはニースの前オーストリア総領事，ニースのフランス仲裁協会の会長をやっていた。今回このルサーン会議場でデウス エクス マキナ的登場をするまで，国際平和運動ではあまり知られていない人物であった。この世界平和会議には過去何回か参加したことがある――1900年のパリ会議の時，それからその2年後のモナコ会議の時も。しかしいずれの時も，目だった存在ではなかった。一度だけ，彼の名前が表に出たことがあった。それは，1898年各国平和協会代表の総会の時だった。当時国境問題で揉めていチリとアルゼンチンの間で戦争が危惧されていた。彼はその時，総会の名で両国政府に声明を送り，仲裁に応じるように嘆願すべきであると緊急動議を提出したのである。総会はただちに両国政府に打電すべし，同時に，必要あらば代表団を派遣すべし，というのが彼の提案であった。そのための経費は，たとえどんなにかかるろうとも，自分が負担すると彼は豪語したのだ。総会は，彼の提案を受け入れ，彼の寄付に感謝したのである。(33) 今回のグロウスキーの派手な登場そしてこれから述べる彼の突飛な行動を理解するのに，この7年前の彼にまつわるエピソードは役立つであろう。

1905年9月24日，会議最終日の翌日，寄付契約書がとり交わされた。600,000万フランは「グロウスキー基金」とし，その管理は，グロウスキーを長としエリー デュコミュン，デ レーアイ，エミール アーノード，ツィマーリ博士らが加わった委員会に委ねられることになった。「基金の執行は，故ジャン デ ブロッホ氏およびその正当な後見人の代弁者たるツィマーリ氏が代表する現博物館運営委員会の規定に沿って行われる」という一文も入った。契約書を作ったの

は，弁護士であるアーノードである。すでにルーヴェンデンクマールに近い土地が候補に上がっていて，順当に行けば，新博物館の開設は1907年春ということになっていた。これらの詳細は，新博物館は寄付者の強い意向と現運営委員会の計画が合致した平和を強調したものになろうという案内と共に，博物館発行の機関誌で紹介された。「戦争展示については，極めて代表的なものだけが残される」とも書いてあった。(34) 現博物館関係者としては，寄付者グロウスキーが博物館の性格をどう変えようとも，それを受ける以外に道はなかった。同年12月19日の機関誌には，グロウスキーがルサーン市から，ルーヴェンデンクマールに近いチューリッヒ通りにある広さ1,040平米の市所有地を200,000フランですでに購入済みという記事が載った。そしてその売買契約書には，新博物館が万一倒産した場合でも，市は可能な限り継続の努力をするという文言があった。(35) 翌1906年５月１日の土地所有者の名義変更を俟って，新博物館の建設作業は開始されることになっていた。

にもかかわらずグロウスキーは，すぐに購入予定地を変えてしまった。フィーアヴァルトシュテッテ湖の右岸，アン デー ハルデという美しい丘にある土地がいいと言い出したのである。そこは，市内のチューリッヒ通りの土地より10倍広く，１平米当たりたったの10フラン，平米200フランするチューリッヒ通りの土地の半分で購入できる所だった。これに対して博物館側は，土地価格はよしとしても，地理的に不便であるという理由で反対した。そこは市の中心部から遠く，せっかく博物館に行こうと思って来た人もあそこまではという気持ちになってしまうだろうというのである。博物館の第１の目的である「可能なかぎり大勢の人に見てもらう」という点からも，現実的な入館料収入の確保という点からも，グロウスキーの新しい土地選択は不適合であった。一方新聞は，勝手な噂を流していた――「グロウスキー，未だ諦めず。市当局，彼の希望を叶える用意あり。」(36) 博物館側は，対策に苦慮した。事態を重くみた博物館運営委員会副委員長のツィマーリ博士は，世界平和会議会長のエミール アーノードに一通の手紙（1906年２月４日付）を送った――「市側には，グロウスキー氏の約束不履行を訴えようという声も出ております。」それから２日後ルサーン市議会が，「先の売買契約を破棄し，新しい契約をしたい」という主旨の手紙をグロウスキーに送った。市側は明らかに，グロウスキーの関心は博物館になしと判断したのである。実はこれより先，１月22日に，エリー デュコミュンも同じ主旨の手紙を伯爵に送っていた。次第にグロウスキーの新しい土地の話は，デュコミュンも一員である「グロウスキー基金特別委員会」と関わりなく出てきたこと，新聞が書き立てた記事は単なる噂であることが明るみに出てきた。1906年２月９日，グロウスキーは市議会に「春になったらルサーンに赴き，件の土地につき相談したい」旨の手紙を送った。この直後から，グロウスキーの消息はぱったり途絶え，音信不通になってしまった。1906年４月20日，市はグロウスキーに短い通告を送った――「季節は寒い冬が終わり，暖かい春になりました。先の売買契約の御支払期限が５月１日に迫ってきております。」市としては，この通告で，アンデー ハルデをグロウスキーには売らないことを知らせたのである。そしてついに５月10日，

市は，これまでの一連の出来事を書き連ね，グロウスキーの良心と誠意に訴えた長い手紙を送った。その手紙の最後に，「告訴する」という言葉があった。(37)

これより前，1906年4月23日のデュコミュンからグロウスキーに宛てた「“和解”のために尽力しよう」という主旨の手紙には，4月26日付の返事があった。返事は，グロウスキーが会長をしているフランス仲裁協会ニース支部の事務局長フィリップ カシミールからで，消息不明の件の伯爵がルサーン市とツィマーリ博士を彼の意に反した契約を結ぶように圧力を掛けたとして告訴すると書いてあった。さらに，「グロウスキーは今後一切ルサーン市とは関係しない。グロウスキーは平和博物館を，ルサーンではなく，ニースに建てることにした。グロウスキーはルサーン市に義理立てする何物もない，あるのは，平和運動に対してだけである。それだけは今後も大切にして行きたい」とも書いてあった。ツィマーリ博士からこの返事の内容を知らされたルサーン市長は，フィリップ カシミールの返事の内容には一切触れず，前述の5月10日の最後通告をグロウスキーに送ったのである。グロウスキーはこれを受けて，再び，デュコミュンに以前と同じような口汚い手紙を送り，デュコミュンに仲裁役を依頼した。もう，グロウスキーには，彼の言う“ルサーン市当局の紳士連中”とうまくやって行く気など毛ほどもないのに。グロウスキーはその手紙の中に，「ニースに自分の博物館を作る積もりだ。新ルサーン博物館については，万一契約が破棄されても，株だけは買う積もりだから」などとも書いた。

1906年夏，デュコミュンが作成した調停案をもとにグロウスキーと世界平和会議会長アーノードの手紙のやりとりがあった。グロウスキーにとって，これが最後の「道徳的破滅から救われるチャンス」だった。(38) だがグロウスキーは，同年8月27日のデュコミュンへの手紙で，相変わらず勝手な申し立てをし，「ニースの博物館はほぼ完成している。自分はヨーロッパのすべての都市の博物館を支援し建てることはできない」と頑なに言い放ち，自ら最後のチャンスを潰してしまった。そして，この件に関する一切の処理を弁護士に任せてしまったのである。グロウスキーは，同年9月自宅からさほど遠くないミラノで開催された第15回世界平和会議に意図的に欠席した。彼の代わりに参加したフィリップ カシミールは，これまでのグロウスキーの平和の大義のための活動，とりわけ1898年のチューリン会議時の提案を称えながら，演説した――「グロウスキーは新ルサーン博物館の株を買う積もりだった。しかし，まずはフランスに第1号の平和博物館を作りたくなった。それで今，ニースの彼の城モンボロンをそれにしようと頑張っている。まもなく平和運動はヨーロッパの3つの素晴らしい都市にそれぞれの平和博物館を持つことになるだろう。ルサーンのブロッホ博物館，ハーグのカーネギー基金館そしてニースのグロウスキー博物館を。」カシミールは最後に，いささかも良心の呵責を感じている風もなく平然と言った――「これで，グロウスキーのルサーン博物館への関与の問題は終わりにしよう。」(39)

今明らかになったことは，グロウスキーのルサーン博物館への関与は財政的に無理があったというよりは，彼の関与の本当の動機が，平和の大義の名のもとに博物館の後見人・救世主に

なって名をあげ名誉を得ることにあったということである。グロウスキーは，ブロッホのように廉潔で信念のある人物ではなく，むしろその逆であった。道楽で平和運動をやり，自分のやることを誉めてもらいたい，拍手してもらいたいと思っている金持ちのおじさんというタイプであった。ミラノ会議では，グロウスキーとの決別がすんなりと承認されたわけではなかった。議論の末，グロウスキー基金特別委員会が提出した決議が満場一致で採択された――「ベルン国際平和ビューローは，グロウスキーからルサーン博物館への関与に関する名誉を剥奪する最後の試みをすること」。しかし結局，ベルン国際平和ビューローもルサーン市もニースからの返答を得ることはできなかった。一方，グロウスキーは完全に沈黙を保っていたわけではなかった。彼は，フランスの新聞に自分の城を博物館にする計画がある，そのためには，200万フラン相当の美術品を売却する用意があると宣伝していた。(40) ニースの新聞は，事もあろうに，「ヘルベチア人の強欲」という見出しで，このグロウスキーの財産を横領しようとしているのがルサーン市だという中傷記事を掲載した。これに対しては，ルサーン市も不問に付すわけに行かなかった。すぐさま，次のような反論を載せた――「グロウスキー氏は，ルサーン市のみならず博物館運営委員会の意向を何の確たる理由もなく踏みにじったばかりでなく，わが市との約束を不履行するその説明さえもしようとしていない。ルサーン市は当初グロウスキー氏の言葉を紳士のそれとして信じていた。いま，ルサーン博物館はグロウスキー氏が関与する以前にもまして苦境に立たされている。」グロウスキーの関与は博物館の将来にとって，まさに有害なものになってきた。ルサーン市のグロウスキーに対する告訴ももはや避けられない情勢になっていた。(41)

グロウスキーはというと，ニース平和協会のある会議で同協会名誉会長ティーア将軍から「体面を保つ行動を取れ」と嗾けられて，一端は裁判を受けて立つと宣言しておきながら，いざその手続きのためにベルン国際平和ビューロー事務局長アルベルト ゴーバートがニースにやってくると，今度は前言を撤回し，その代わりに新ルサーン博物館の株を50,000フラン分購入する用意があると言ったりしていた。もっともこの話も，あとで彼は御破算にしてしまった。グロウスキーという人物は，事ごとさように，自分のことさえ自分でできない頼りない人物であったのだ。(42) 1906年のデュコミュンの死後ベルン国際平和ビューローの新事務局長となり，デュコミュンと共に第2回のノーベル平和賞を受賞したアルベルト ゴーバートは，1907年9月のミュンヘン世界平和会議でグロウスキーを評してこう語った――「‘本当の名誉とは何かを全く知らない人間’とこれ以上関わりを持つことは，ルサーン博物館の品位を下げることである。」同会議でラ フォンテーンが提案した決議文も，「本会議は，グロウスキー氏の寄付者にあるまじき前代未聞の態度および約束を不履行せんがためにとった数々の愚行を厳しく糾弾する」とグロウスキーを酷評した。(43) 2年の貴重な歳月が，グロウスキーのために失われた。博物館は，遅くとも1909年までには，現在の建物を明け渡さなければならない。もし，本当に博物館の存続を願うならば，もう一刻の猶予もない。ミュンヘン会議は，博物館存続の手段・

方法を探るべく，委員会を構成した。同会議はすでに前月８月，「平和の友へのアピール」を出していた。そして会議後の10月，博物館存続のための優先株申し込み書とその趣意書を発行したのであった。趣意書はその後，1908年２月３日，1909年７月20日にも出された。ミュンヘン会議の後，委員会は平和運動の著名人や慈善事業家にも接触し，委員会のメンバーになってもらうか株を買ってもらうかした。(44) ルサーン市は，現博物館の改装を提起し，その費用の半分を負担しようと言ってきた。かかる費用は400,000フラン，「平和の友の会」は200,000フランを調達しなければならない。同会は，年利３％という最低配当率の一株500フランの優先株を発行することにした。(45) それでも，次の世界平和会議までに調達しなければならない100,000フランが残っていた。

29．来館者の数については次を参照：Internationales Kriegs- und Friedensmuseum in Luzernの年次報告書 *Bericht des Verwaltungsrates an die VI.Generalversammlung über das Geschäftsjahr* 1905（Luzern, 1906, 15pp.）

30．*Bulletin Officiel du* 14*e Congrès Universel de la Paix, tenu à Lucerne*（19-23 Sept.）. Berne, Bureau International de la Paix, 1905, pp. 86-87.

31．1905年10月４日のツィママンからデュコミュンへの手紙には，「グロウスキーは，あの申し出は，博物館でデュコミュンとツィマーリの話を聞いた後とっさに思いついたと，あとで私に話していた」とある。

32．*Bull., o.c.,* pp. 77-80.

33．*Procès-Verbal de l'Assemblée Générale des Délégués des Sociétés de la Paix, Turin, 1898.* Berne, Bureau International Permanent de la Paix, 1898, p. 19.

34．*Die Stiftung Gurowski* in: *Die Friedens-Warte,* vol.Ⅶ, nr. 10, Oktober, 1905, p. 202.

35．*Stiftung Gurowski de Wczele* in: ibid., vol.Ⅷ, Jauar 1906, p. 16．契約の詳細については，1905年12月５日にルサーン市が，そしてその６日後にグロウスキーが署名した*Kaufvertrag*（売買契約書）および同年12月27日の*Bericht und Antrag des Stadtrates von Luzern an den Tit. Grossen Stadtrat*参照。ルサーン市はグロウスキーの新博物館建設のための土地購入を称え，1905年９月30日の彼宛の手紙には「ルサーン市民は貴殿のご高恩に感謝の意を表するため，貴殿に対し名誉市民の資格を授与することを検討しております」と書いた。

36．*Stiftung Gurowski* in: ibid., vol.Ⅷ, Februar 1906, pp. 37-38.

37．この「一連の出来事」は後で次に全面転載された: *Der Friede.*Bulletin des internationalen Friedensbureaus in Bern. Vol. XⅢ, nrs. 17-18, 20. Sept. 1906, pp. 3-5（'Graf Gurowski und das neue Friedensmuseum'）

38．1906年９月１日のツィマーリからデュコミュンへの手紙にこう書いてある。

39．*Bulletin Officiel du* 15*e Congrès Universel de la Paix, tenu à Milan*（15-22 Sept.）. Berne, Bureau International de la Paix, 1906, pp. 92-93.

40．この種の記事は，カシミールが編集者になっているニースの*Journal de la Corniche*新聞に頻繁に掲載された(例えば,1906年９月30日付を見よ)。グロウスキーが自分の城をどのように博物館にしようと思っていたかについては，1906年11月９日付の記事 '*Le Musée de la Paix à Nice*（ニース平和博物館）'を参照。

41．*Graf Gurowski und das Luzerner Friedensmuseum* in: *Die Friedens-Warte,* vol. Ⅷ,Dezember 1906, pp. 234-235.

42．1907年４月21日付の*Journal de la Corniche*は，またまたグロウスキーを称える記事（Le Musée de la Paix Lucerne-Nice）を掲載した。

43．*Bulletin Officiel du* 16*e Congrès Universel de la Paix, tenu à Munich*（9-14 Sept. 1907）. Berne, Le Comité

d'Organisation du Congrès de Munich, 1908, pp. 48-51, 71.

44. 例えば，米国会議員 Richard Bartholdt 他 Evans Darby, Emilie de Bloch, Edwin Ginn,John D.Rockefeller との文通参照。この件に関しても，いつものように，国際平和ビューローが積極的に関与した。

45. *Official Report of the 17th Universal Congress of Peace...London* (27 July-1 August 1908). London, The National Council of Peace Societies, 1909, pp. 97-98, 137.

## 6　財政難——そして，閉館

博物館の将来をどうするかの議論が再び起こった。当然，議論の中心は，これまでのように戦争展示中心でいいのかということであった。1907年9月のミュンヘン世界平和会議では，博物館の建物の移転と同時に中身の変更も行うべしという意見が圧倒的であった。キデ博士は，「現博物館の展示物は，博物館の初期の目的とは全く反対の好戦的な感情を来館者に抱かせる危険がある」と言っていたし，ミード夫人に至っては，「戦争に関する展示物を歴史博物館に売却し，その金で平和博物館らしい博物館を建ててはどうか」とまで言っていた。博物館運営委員会のツィマーリ博士は，「博物館は，創設者ブロッホの“戦争それ自体が戦争に反対する証言者となろう”という基本的な考えに基づいて建てられたもの」と反論するのが精一杯であった。現博物館の展示物に関する批判の声は相次ぎ，結局，新博物館の展示の中心は平和展示にすべしとなった。(46) 会議後，ツィマーリの反論を支持する記事が『平和ウォッチ』に載った。記事は，「ミュンヘン会議の議論は，博物館にとっての最大の損失が，あの忌まわしいグロウスキー事件で博物館の将来を考える時を失ったということより，ジャン デ ブロッホが早逝したということにあるということを示したのだ」に始まって，ブロッホの理論・方法論そして結論を要約し，最後に，「したがって，ミュンヘンでの提案は創設者ブロッホの意図に反するものである」という意見を展開したのである。(47)

だがしかし，もっと平和主義的色彩を色濃くの主張が勝っていた。博物館側もこれまでの弱点を認め，それを補うべく次第に平和部門の展示を増やしていった。「ブロッホの理論」を具現化した戦争展示物を破棄することなく，それらが他の平和展示物を補完し，両者相俟って博物館の目的をより明確にするような形で。それでもなお，さらに急進的な変革を求める平和主義者もいて，彼らは，博物館からブロッホ色を一掃することを主張していた。ブロッホあってこその博物館であり，それ故博物館は，「前例のない，完全に独創的な創造物」(48) と称えられ，ブロッホの独創的な思想に「じかに手で触れ，目で見ることができる場所」であるはずだったのだが。博物館の変革に関するこうした意見の食い違い——その多くは，平和運動内部でというよりは，平和運動と博物館側の間で起きたのだが——は，しかし，博物館がムーゼック通りに移転した後の急速な衰退の原因のほんの小さな一部にしか過ぎなかった。博物館は、ようやくここに移転先を得た。そこは，土地50,000フラン，建設費200,000フランであった。資金は各方面から掻き集められた。博物館は70,000フラン分の優先株を発行し，80,000フランは博物館を担保に借りた。ブロッホ遺族は，開館当時から持っていた70,000フランの博物館債券を換

金し，それで改めて博物館株を買った。「ブロッホ基金」[49] からも，若干の助成金が出た。例のグロウスキーの死後，約束不履行と法的手続代の賠償という名目の60,000フランも入ってきた。

新しいルサーン博物館は，1910年7月15日，静かにオープンした。ここ数年，財政難で閉館寸前と噂されてきた中で。[50] 1910年の来館者数は18,000と少なかった。だがその後数年間は，徐々に増え，第一次世界大戦の前年には最高の37,000人――とはいえ，この数も移転前の来館者数を記憶している者にとっては少ないものではあったろうが――を記録した。大戦中の来館者の急激な減少は博物館財政にひびいた。1917年には30,000フランの損失が出て，もはや継続は困難な状態になっていた。1919年，土地と建物が市に売却された。展示物を売却しても，優先株の返還金の半分にしかならなかった。博物館の建物は，しばらくの間博物館として残っていた――美術・工芸の博物館として。それからのち，学校になった。ルサーン戦争と平和博物館は，第一次世界大戦――それを起こさないための小さな試みとして，ブロッホはこの博物館を作ったのだが――の犠牲になったと言ってよいだろう。大戦は，人々のルサーンへの旅の足を止め，それでなくてもか細い博物館財政を圧迫した。大戦は，戦争の現実，それも博物館が展示するものよりもはるかに凄まじい現実を，毎日のように人々に見せつけ，博物館に行く必要性を人々から奪った。そして大戦の後も，「戦後の平和処理」の「平和」という言葉が人々に猜疑と疑惑を抱かせたように，ルサーン博物館の「平和」にも同じような気持ちを抱かせた。第一次世界大戦は，かつてブロッホが予言したように，ヨーロッパを飲み込み，一つの時代を終わらせた。ルサーン博物館は，大戦が破壊した多くの貴重な物の中では，それほど特筆大書すべき物ではなかったかもしれない。しかし，その発想と存在は，80年前の事とはいえ，人間の崇高な平和への試みの一つとして，今日のわれわれの記憶の中に留めてしかるべきである。

46. *Bulletin...Munich, o.c.*, pp. 50-51.
47. *Einige Bemerkungen zu der Diskussion über das Internationale Kriegs- und Friedensmuseum in Luzern* in: *Die Friedens-Warte*, vol. X, Januar 1908, p. 20.
48. Bertha von Suttner, *o.c.*, p. 23.
49. ブロッホは自分の理念の普及のために，50,000ルーブルを「基金」として残していた。「基金」は，ベルン国際平和ビューローが管理し，向こう10年以内に使うことになっていた。
50. *The Lucern Peace and War Museum* in: *The Times*, 29 March 1909, p. 10.

（つぼい　ちから　人文学部教授　平和学専攻）